

自分が出会った 関心の先に 世界との つながりがある 社会起業に挑戦する若者たち



いのうえひでゆき
慶應義塾大学専任講師
ソーシャルベンチャー・
パートナーズ東京代表

いのうえ ひでゆき ● ジョージワシントン大学大学院卒業後、ワシントンDC市政府などを経て、ETICに参画。2002年より社会起業コンテスト「STYLE」を開催。05年、ジャパンフアウンデーション・NPOフェロー。同年より慶應義塾大学専任講師、またソーシャルベンチャー・パートナーズ東京を設立し、代表を務める

それでも、自ら動かなければ、
自分の人生は動かない

近年、留学する若者が減っているという。学生のみならず、研究者もビジネスパーソンも国内に留まりがち。海外駐在を、家族や周囲の反対もあり（反対は以前からあったと思うが）、そんな苦労はしたくないと辞退する人も増えているとも聞く。全体として、日本経済のみならず、日本人個人のプレゼンスが下がっていることを、たびたび耳にする。

確かに「国際的である」ことは、少ししんどい。私も実感として、そう思う。20代の約半分をアメリカで過ごし、2度留学もした。決してネイティブではない私には、言葉の壁ももちろんあり、苦難も多かった。20歳のころに留学した1年間は、99%失敗ばかりだった。その後、ワシントンDCの大学院に進学し、ワシントンDCの市政府でも働いた。自分の居場所が見つからず、友人も少なく、不安でたまらなかつた。

それでも、私が自ら動かなければ、自分の人生は動かない。あいまいな感覚のなかで生きる東京での毎日より、ずっと生きるリアリティに目が覚める感覚があつたと思う。素晴らしい人たちとの出会い、自らの成長。自分の力を試したい。自分にはどうしてもやりたいことがある。今もって、海外に行くことには、楽しみと不安がいつも混ざるが、その背伸びがこれからも自分の人生をより素晴らしいものにしてくれると思う。

日本人は、ほんとうに「内向き」なのだろうか。私が授業をもっている慶應義塾大学でもさまざまな若者がいる。二極化している、ともいえなくない。だが、少なくとも、「社会起業」とい

う分野に限っていえば、楽しそうに国境を越えていく若者たちに多々出会う。彼らは、必ずしも帰国子女ではないし、もともと外国語ができるわけでもない。ただ、出会ってしまった問題や、突き動かされる何か、内なる衝動をもとに、以前よりもずっと肩に力を入れることなく、海外に飛び出していく。当然、現地で出会う困難も多々あるが、転んでも立ち上がり、自分のプロジェクトを変更し進化させ、成長していく姿に、私もよくはつとずる。

この稿では、「社会起業家（ソーシャル・アントレプレナー）」と呼ばれる分野から見える、国境を越えていく彼らの姿を紹介したい。

**社会起業コンテストに応募する
ふつうの若者も増えてきた**

私は、2001年よりNPO法人ETIC（東京都渋谷区）内に、ソーシャルベンチャーセンターをつくり、日本でも初めての社会起業向けプランコンテスト「STYLE」を開催してきた。その後、ETICとNECが協働で続けている若い社会起業家の登竜門である「NEC社会起業塾」でも、多くの志ある若者に接してきた。

ファクトリーで働く少女に話しかけるNPO法人かものはしプロジェクト共同代表の村田早耶香さん。かものはしプロジェクトでは、カンボジアの貧困層の子どもたちを児童買春の被害から守るために、コミュニティファクトリーを建設。職業訓練と仕事を提供している。
www.kamonohashi-project.net
写真提供：NPO法人かものはしプロジェクト

当初は、いわゆる起業家的な、よい意味で少し変わった若者が多かったのが、だんだんと、これまでならふつうに就職しているような若者も、こうした機会に応募し、何かをしようという情熱に出会うことも多くなった、と感じている。

「かものはしプロジェクト」は、03年の「STYLE」で優秀賞を受賞した事業だが、カンボジアの貧困層の子どもたちを児童買春の被害から守るために、農村の収益向上プロジェクトやPCスクールを通じた職業訓練などを行なっている。当時、フェリス女学院の学生だった代表の**村田早耶香さん**を中心とした、学生のチームが始めた事業で、IT事業部（ビジネス）とカンボジアの子ども向けの事業（NGO）の両輪をもつ点がユニークだ。

「私が出会った6歳と12歳の姉妹は、家が貧しく、売春宿に売り飛ばされ、電気ショックを与えられながら無理やり働かされていたところを保護されていた」という、彼女の先にはたくさん子どもたちがいる。

山口絵理子さんは、「マザーハウス」という途上国発のファッションブランドで、バン格拉デシユを中心とする途上国で製造した品質の高いバッグなどを

販売している。私のいる慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス出身で、キャンパスで山口さん知らない人は少ない。もともとは海外経験もなく、英語も決して達者ではなかった彼女が、思い切って挑戦した国際機関でのインターン。そこで彼女は、途上国のリアリティのなさに驚き、単身バン格拉デシユに足を運ぶことから物語は始まる。さまざまに試行錯誤を繰り返しながら、ビジネスを通じて、日本と途上国のリアリティを、バッグを通じてつないでいる。現在、都内でも店舗を持ち、また、彼女の夢はさらにネパールへと展開している。

小暮真久さんは、TABLE FOR

「マザーハウス」代表の山口絵理子さんは、バン格拉デシユでジュート素材にした高品質のバッグを製造（写真）し、日本で販売。同時にサイクロンの被災者支援なども行なっている。最近、ネパールでもバッグの生産を始めた。
www.mother-house.jp
写真提供：マザーハウス

「WOOの事務局長として知られる。07年に、それまで勤めていた外資系コンサルティング会社を離れ、さまざまな協力者とともに立ち上げた。開発途上国で10億人が飢えに苦しむ一方で、先進国では10億人が肥満や生活習慣病に苦しんでいる。こうした深刻な「食の不均衡」を解消するため、日本での社員食堂などでとる食事のうち、健康に気遣ったメニューを注文、そのうち20円をアフリカのために寄付するというモデルを生み出した。08年末までの約1年間で、TABLE FOR TWOプログラムへの参加企業・団体数は100を超え、08年にニューヨークに支部を開設している。

違和感や関心から何かを始め、現地に飛び込み、進化する

私の身近にいる学生たちにも、さまざまな動きがある。慶應義塾大学大学院（社会イノベータコース）の**山田貴子**さんは大学院の授業とフィリピンを往復しながら、フィリピンの若者たちを援助の対象ではなく、彼ら自身の自助を引き出すことから変化を生み出して行く「Waku-Workプロジェクト」を事業として開始。まずは、フィリピン

小暮真久さんが事務局長を務める「TABLE FOR TWO」は、開発途上国の飢餓と先進国の肥満や生活習慣病に同時に取り組む、日本発の社会貢献運動。寄付金を元にウガンダ(写真)、ルワンダ、マラウイの3カ国の給食事業を支援している。www.tablefor2.org
写真提供：TABLE FOR TWO

人による、スカイプを使つての日本人向け英語レッスンを始めている。

ほかにも早稲田大学の**三好大助**さんは、グラミン銀行(貧困層に対して、無担保で少額の事業資金を融資する銀行。2006年に設立者のムハマド・ユヌスとともにノーベル平和賞受賞)とのコラボレーションを実現。日本の学生たちがバングラデシュの農村でのIT支援をするプロジェクトを行なっている。

二人とも、最初にプロジェクトを立ち上げた時点と現在の姿は、ずいぶん違う。三好さんの場合は、学生によるバングラデシュ向けのビジネスプランコンテストだったが、現地での実際のニーズに出会い、今の姿に変更している。リアリティと出会い、変更し、一歩ずつミッション実現に近づいていく。

彼らに共通する点は、何らかの立脚点となる「原体験」や、突き動かす体感を、自分の力で生み出していることだ。日常で出会った社会への違和感や小さな関心の火種から、何かを始めようとしていること。そして、それを解決していくために、まずは直観でもいいから新しいアイデア

アをもつて現地へ飛び込み、リアリティに出会い、進化を続けていることだ。先駆者として世界に知られる日本の社会起業家、「マイクロファイナンス・インターナショナル・コーポレーション」の**板迫篤昌**さんは、世界で優れた社会起業家を支える財団「アショカ」の日本人初のフェローだが、彼は、金融マンとしての豊富な海外経験を持つプロフェッショナルでもある。

バングラデシュ等で社会投資を行なう**原文二**さんも、ベンチャー投資の分野で国際的に活躍してきた国際キャリアだ。積み上げてきたキャリアを生かして、活躍するプロフェッショナルの生み出す社会的なインパクトは大きい。

一方、前述の若い彼らは必ずしも豊富なビジネス経験もなく、緒方貞子さんのような帰国子女でもない。むしろ、日本で育った、ふつうの日本人たちも動き始めている。

社会性を重視する「商人道」には世界に通ずる普遍性がある

社会起業家というのは、簡単にいえば、自らの事業の目的を、利益をあげながらも、何らかの社会的な意義を生み出すことに置く、社会に対する起業家精神あふれる人たちである。「そんな甘いことを」と思われる方もいるだろう。だが、例えば、地球環境問題が待ったなしの状況において、地球や自然環境を明らかに壊しながら、特定の事業を継続していくことはすでに現実的ではない。

この社会起業(Social Entrepreneurship)という概念は、近年あちこちで取り上げられている。欧米のみならず、アジアやオーストラリア、さまざまな国の大学やビジネススクールで、このテーマに関する講座やコースが誕生している。また、オバマ政権下でも、大統領直属の社会イノベーション室(Office of Social Innovation)を立ち上げ、

山田貴子さん(中央)は株式会社Waku-Workを設立。「生まれた環境に関係なく夢を見つけ、夢をかなえられる社会」の実現に向け、フィリピンの若者とともに「想いを形に変えるしくみ」を創出したいと語る。wakuwork.jp
写真提供：山田貴子

三好大助さん（手前中央）はグラミン銀行の最先端ITプロジェクト「One Village One Portal (OVOP)」のGlobal Change Makers Program 日本事務局代表を務める。バンングラデシュの農村でフィールドワーク調査を実施。そこから発見した問題のソリューションアイデアをグラミンググループへ提案する

写真提供：三好大助

新しい問題解決の手法として、今後の資本主義のあり方を問い直す存在として、この分野に注目している。

過去を振り返ってみると、日本でも数多くの会社の社是は社会性を訴えているし、多くの会社の創業精神にはよりよい社会への寄与が含まれている。

日本には、100年を超す老舗が多く、そうした企業の多くは、時代とともに変化しながらも常に、地域や社会との共栄を考慮しており、それが、創意工夫や従業員モチベーションにもつながっている。

実は、室町時代後期の豪商や江戸時代の商人を見るまでもなく、「商い」というものの価値に、社会的な価値を重ね合わせた「商人道」を示した商人たちは多い。ここでは誌面を割けないが、かつて劇作家の山崎正和氏が、「日本文化の世界性」という論文等で論じていたように、そこには世界に通ずる普遍性もある。

先人が積み上げた信頼のおかげで、日本人だからできることがある

最後に、先日、私の主催した会で、日

本ポリグル社の小田義利社長からお話を伺う機会があった。日本ポリグル社は、納豆に含まれるポリグルタミン酸を研究、汚水の浄化技術を開発、バンングラデシュを始めとした途上国で、貧困層を「顧客」とした事業を展開している。

印象的だったのは、今、日本人が途上国でできるビジネスはたくさんあり、現地へ赴き、人々に出会い学びながらさまざまなことができるようになったBO P (Bottom of Pyramid) ビジネスにぜひ、取り組んで欲しいという話とともに、若者たちにどんどん海外に行って欲しいと語っていたことだ。

決して簡単なことではないが、今の途上国には創意工夫次第でさまざまなチャンスがある。そして今、海外で事業展開できるのは、「日本人だから」ということも効いている。それは、これまで日本の先人たちが積み上げた信頼で、日本人はよい製品をつくっていく、そして正直で嘘をつかないと思われている。だから、その先人たちの遺したものがあるうちに、どんどん飛び出したい、と話していた。前出の山口絵理子さんも、著書の中でこんなことを言っている。「バンングラデシュの人が自分に問いかけている

ような気がした。『君はなんでそんなに幸せな環境にいるのに、やりたいことをやらないんだ?』

当然のことだが、世界とは「外国」のことではない。それは、外に何かを求めるのではなく、等身大の自分に、素直に問い、動き出していく。その延長にある、今の世界は当然のごとく、日本だけでは成り立っていない。今、この日本に立っている自分が、出会ってしまった関心をなんとかしたい。その自然な連続として、世界とのつながりがある。展開がある。若き社会起業家たちの姿を見ていると、そういう時代に来ているのだと感ずる。

日本人の、新たな展開に期待したいし、私自身もそうありたいと思う。この原稿を書いてから1週間後、私は中国の財団に招かれ、北京で登壇する。世界に知られる社会起業家デヴィッド・グリーン（途上国を中心に格安で医療を提供する事業で知られる「プロジェクト・インパクト」創始者）や「アショカ」の中国代表らと一緒に登壇する予定だ。ふだん使わない英語でのパネルだが、やはり私には伝えたいことがある。また新たな自分に会ってこようと思う。☺